

鄭曉『今言』と『倭寇図巻』

解説 岸本 美緒

鄭曉『今言』(1566年)

近年の東南地域の倭寇には、おおむね中国の人が多い。力が強く胆力もあり、知恵もある者は往々にして賊となる。……彼らは荒々しく勇敢であるが、出世の手段もなく生計の道もないため、よほど道徳的な人間でなければ苦しい生活に我慢できず、暴れまわって気を晴らそうとするのである。そこでこっそり故郷を離れ、異民族に寝返る。倭奴〔日本人の蔑称〕は華人を耳目〔情報源〕とし、華人は倭奴を爪牙〔実行部隊〕とする。……まして中国と外国とのあいだで交易をおこなえば、生産地と購買地のあいだでは品物の価格が大きく異なり、数倍の利益が得られる。いまこれを禁止しようとしても、なんとかして交通しようとし、利益の道がふさがれば反乱の発端が開かれ、たがいに誘い合って叛徒は日ごとに増加するだろう。現実的な寛容政策をとらなければ、数年後に大きな反乱がおこり、手の付けようもなくなるだろう。(著者訳)

鄭曉『今言』の読み解き

鄭曉(1499～1566)は浙江省沿岸部の海塩県出身の明代の官僚で、科挙に合格したのち、兵部(「六部」の1つで軍事関係の役所、現代日本でいえば防衛省)で勤務し、軍事関係の調査をおこなう役職についた。そこで古今の文献を読破し、辺境の国防に関わる書物を著して注目された。その後、倭寇に対する防衛などの実務にもたずさわったが、官僚としてというよりは、辺境問題に詳しい学者として有名であった。『今言』は彼の晩年の随筆で、明朝建国以来の政治・制度について記しているが、とくに辺境関係での彼の見識が簡明に述べられている。

この引用文(『詳説世界史』〈世探704〉p.153に掲載)では、「倭寇」問題が論じられているが、「倭寇」とは当時の中国で使われていた言葉で、文字通りでは「日本人の盗賊集団」の意味である。英語では一般に、Japanese pirates と訳される。

この史料で読み取っていただきたいことの第1点は、前半部に明瞭に書いてある通り、いわゆる「倭寇」のなかには、「中国の人」(原文も「中国之人」)が多く、「倭奴」と「華人」とが協力し合って略奪行為をおこなっている、という指摘である。「倭寇」を「中国に対する日本人の侵攻」ととらえるのではなく、中国・日本を問わず様々な出自の人々が合体した集団とみなしている点は、鄭曉の創見というわけではなく、徽州出身の王直が倭寇の首領であったことからわかるように、当時よく知られたことであった。第2に注目すべきは、後半部にみられるように、中国人が倭寇の略奪活動に参加する理由として、海外貿易の利益が強調されている点である。鄭曉は明の官僚として倭寇の略奪行為を抑えることに腐心していたが、彼の考えでは、軍事的鎮圧のみではそれは不可能であった。利益を求める人々の欲望を無理に抑えようとするれば、かえって大規模な反乱を招いてしまうだろう、というのである。

「倭」のイメージ

鄭曉は、いわゆる「倭寇」のなかには多くの「中国の人」が含まれていたという。鄭曉はその割合について、別の文章(『皇明四夷考』)では、「(倭寇の)賊はみな華人であり、倭奴は10分の1、2に過ぎない」とも述べている。中国人がほとんどであったとするなら、なぜ「倭」と呼ばれるのだろうか。教科書掲載の『倭寇図巻』の戦闘場面(『詳説世界史』〈世探704〉p.153など)から、「倭」とは何だったのかという問題のヒントを探ってみよう。

東京大学史料編纂所蔵の『倭寇図巻』は、16世紀末から17世紀に中国で書かれたものと推定され、倭寇に関する重要な視覚史料として従来から活用されてきたものだが、近年新たな方向からの研究が進んでいる。第1に、赤外線撮影により、図中の倭寇船の旗に書かれた「弘治四年」という日本の年号(1558年)が解読でき、この図が16世紀半ばの倭寇最盛期の戦闘を題材にしていることが解明された。第2に、中国国家博物館蔵の「抗倭図巻」やその他の文献史料から、同じモチーフの複数の図巻の存在が明らかになり、それらの異同や系譜関係を考察する道が開かれた。現存諸図のもととなったのは、倭寇に対する明軍の大勝利とその将軍の功績を強調する目的の作品であったと推測されている(東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』〈吉川弘文館、2014年〉)。図中の倭寇と明軍の描写にも、そうした意図が反映されているとみるべきだろう。

図 「倭」(日本人)のイメージ 明末の日用百科全書『學海群玉』より(東京大学東洋文化研究所蔵)。左側は、女直(女真、のちの満洲人)の武人の絵。

『倭寇図巻』の戦闘場面では、「倭」の側は、全身軍装の明軍と明らかに異なり、特徴的な姿で描かれている。剃った月代、むき出しの脚、粗末な着物などである。これに加えて当時は、抜き身の日本刀も倭人のシンボルとみなされており、明清時代に出版された日用百科全書の類には、パターン化された倭人の図が多く収録されている(図)。倭寇の仲間となった華人が、頭を剃り、倭風の着物を着て略奪活動をおこなっていたということは、当時の史料でしばしば指摘されている。その1つの理由として、一般住民が異様な姿の侵入者を恐れて逃げてしまうため、略奪がしやすいということがあろう。また同時に、いったん仲間に入った者が裏切らないようにするため、強制的に頭を剃ってしまうこともあった、とされている。

ただこれを、たんなる「偽装」といってよいかどうかは問題である。村井章介は、14～15世紀の前期倭寇と16世紀の後期倭寇をあわせ、また朝鮮も視野に入れて、つぎのように問題提起している。「倭服は東アジア海域の海賊に共通のいでたちであり、倭語はその共通語だったのではないか。その服を着、そのことばを話すことによって、かれらは帰属する国家や民族集団からドロップ・アウトし、いわば自由の民に転生できたのではないか。」「倭寇の本質は、中国人が多いとか朝鮮人が多いとか日本人が多いとかいったことにあるのではなく、国籍や民族を超えたレベルでの人間集団であるところにあり、だからこそ環シナ海地域の担い手たりえたのである」(『アジアのなかの中世日本』〈校倉書房、1988年〉p.332)。このような観点からすれば、「倭」とはそもそも、「日本」とは必ずしも等置できない、国境を超えた海域の人間集団を指すということになろう。しかし一方で、「倭寇」をきっかけに形成された、野蛮で好戦的な隣国としての「日本」のイメージは、その後も長く中国で受け継がれ、日清戦争や日中戦争の際にも改めて浮上してくるのである。

沿海の商業ブームと倭寇

鄭曉は、『今言』の別の部分で、「昔は夷人が中華に入ったが、今は華人が外夷に入る」と述べ、「華人が外夷に入る」近年の例として北方の対モンゴル戦争や東南沿岸の倭寇をあげている。当時「北虜南倭」といわれた辺境問題は、鄭曉の考え方からすれば、「華人が外夷に入る」ことにより生じたものということになる。ここで鄭曉は、明代と対比される「昔」の例を具体的にあげてはいないが、推測してみるならば、たとえば漢代における匈奴の侵入を考えることができる。漢代にも、匈奴に協力した漢人はいたかもしれないが、明代のように対外交渉の利益が多くの人々を引き付けるといふ状況とは異なっていただろう。漢代には、穀物や絹などの富はもっぱら中国の農耕地帯にあり、匈奴はそれを目当てに侵入してきた、すなわち「夷人が中華に入って」きたのであった。

それに対し、鄭曉が強調しているのは、「今」すなわち明代中期の中国の内地では生計を立てることが困難であるため、胆力と知恵のある者は、禁令をおかしてでも利益の上がる対外貿易に従事しようとする、ということである。このような状況は、中国の歴史上、新しいことであると、鄭曉はみていたといえる。1つ疑問に思えることは、家内制手工業や長距離商業が発達した明代中後期に、中国国内の人々は本当に貧しかったのか、ということである。しかし、当時の中国で書かれた史料はほぼ例外なく、明朝前期に比べて人々の生活は苦しくなった、と述べている。その理由の1つは、北方での戦争のために全国から税として銀が徴収され、しかも中国国内では銀がほとんど生産されず慢性的な銀不足におちいつているため、人々が重税感に苦しんでいることであった。おりしも16世紀には、日本での銀産が急速に増大していたが、明初以来の海禁(民間海上貿易の禁止)のため、日本銀を輸入する道は閉ざされていた。そうしたな

かで、海禁を破って密貿易をおこない、取締りに対抗するため武装する集団が生まれてくるのは自然である。それが倭寇であった。

引用史料は生産地と購買地のあいだの価格差に言及しているが、その典型は、中国の生糸であろう。中国産の上質生糸は日本では「白糸」と呼ばれ、ときには生産地価格の10倍もの値が付けられたとされるが、それは中国産生糸が高品質であったからばかりではなく、中国で不足していた銀が日本では豊富であったという事情にもよる。銀納税の重圧に苦しむ中国の農民は、希少な銀を手に入れるため安くても生糸を売らざるをえないが、一方で、生糸の購買者・消費者である日本の大名や商人の手元には、銀山で採掘された大量の銀があるわけである。「胆力もあり、知恵もある」人々が、このような利益に引き付けられるのは当然であろう。沿海部の諸都市では、官僚経験のある有力者のなかにも、密貿易集団の後ろ盾となって利益にあずかる人々がいた。

鄭曉のこの文章が書かれて間もなく、明朝は海禁を緩和し、民間人の海上貿易を許可した。また、1565年にメキシコからフィリピンへの太平洋航路が発見され、71年にスペイン人がマニラを建設すると、アメリカ大陸の銀もマニラ経由で中国に流入するようになった。しかし、明朝は、日本を危険な国とみなして日中間の直接交易を依然として禁止していたため、東アジアで最大の利益をもたらす日本銀と中国生糸の交易は、長崎とマカオを結ぶポルトガル船によって担われることになった。日本で「南蛮貿易」が盛んになったのは、日中貿易の中枢をポルトガルが握ったことによる。

鄭曉のこの文章が書かれた1560年代は、商業活動が世界的な規模で急速に活発化する時期であり、そのような世界的な動向を背景に「華人が外夷に入る」状況を考えることにより、たんなる海賊ではない倭寇の姿がみえてくるだろう。

(きしもと・みお／お茶の水女子大学名誉教授)